

# ドグマティズムの因子分析的研究

善 明 宣 夫

## 1. 問題と目的

マスコミの報道によれば、ヨーロッパでは移民・難民による社会変化への不安、イスラム過激派によるテロへの恐怖、グローバル化に伴う社会経済的な変容、特に格差の拡大などの問題から、排外主義が勢いづいている。またアメリカ大統領選でも、保護主義的で排外主義的な政策を前面に打ち出した候補者が支持を集め、最終的には勝利を取めた。こうした、プロパガンダからの影響の受けやすさ、指導者への無批判的な同調、敵対者に対する不寛容さに関連した個人的特徴については、これまでに権威主義やドグマティズム（独断主義や教条主義と訳されることもあるが、ここでは原語のまま片仮名表記とする）として研究されてきた。ここで取り上げるドグマティズムは、アメリカにおいて1960～80年代を中心に研究が行われた概念であり、2000年代になるとこのテーマでの研究はほとんどみられなくなった（善明，2001）。しかし上記のような昨今の世界情勢をみると、再度この問題を取り上げることに意味があると思われる。そこで、まずは権威主義とドグマティズムとの関係やドグマティズムという概念についてみていくことにする。

### 1) 権威主義とドグマティズム

第2次世界大戦中にナチスの行ったユダヤ人に対する非人道的行為は世界に衝撃を与えたが、なぜそのような悲劇が起こったのかについては、ヒトラーやナチスの問題ばかりでなく、そうした考えを受け入れ、権威に追従し、結果的に悲劇的な蛮行に加担した一般大衆の心理にも関心が向けられた。こうした時代には出版されたのが、Frommの『自由からの逃走』（*Escape from Freedom*, 1941）である。この著作でFrommは、人間が近代社会において獲得した自由の重荷という問題を基調に、その重荷からの逃避のメカニズムについて分析を行っている。近代人は、未開社会の成員をその氏族や自然に結びつけ、中世の人間を教会やその社会階層に結びつけていた前個人的な絆から解放され自由を獲得したが、その代価として孤独という問題を背負い込まねばならなくなった。しかし、この問題は予想以上に耐えがたいもので、自分を何かに帰属させることで孤独から逃れ、心の安定を得たいと願うようになる。その結果、自分以外の、よ

り大きくて力強い全体（権威）の一部になることを望み、権威への盲目的な追従が生じるとされる。一方、権威への服従は完全に成功することはなく、自己の不全感から、信頼し服従する権威に対して敵意と反抗が起こってくる。しかし、ここでの敵意は当の権威には向けられず、置き換えという防衛機制によって別のはげ口が求められる。この場合、はげ口とされるのは敵意を正当化しやすい社会的に立場の弱い人々や集団に向けられることが多いとされる。こうした服従と支配という両価的傾向がみられ、それが支配的なタイプを、Frommはサド・マゾヒズムの性格、あるいは権威主義的人格と呼び、こうした社会的性格をもとにナチズム台頭の心理社会的過程について分析を行った。

その後、ナチスの迫害から逃れるためにアメリカに渡ったフランクフルト学派の研究者と、Sanfordらのカリフォルニア大学世論研究グループが共同で行ったのが、ユダヤ人に対する人種的偏見の研究としてよく知られているカリフォルニア研究である。これは1944年に開始され、数年かけて調査を実施するといった大がかりな研究であったが、その成果をまとめたものがAdornoらの『権威主義的パーソナリティ』（*The Authoritarian Personality*, 1950）である。

もともと反ユダヤ主義から出発した彼らの研究の焦点は、人種的偏見と敵意の問題であった。一連の実証的研究の中で、反ユダヤ主義的偏見を持つ人は他の少数者集団に対しても偏見を抱きやすく、政治経済的には保守主義的であることが見いだされた。また最終的には、そのような社会的態度の根底には潜在的なファシストや非民主的なプロパガンダに影響を受けやすい人に共通する特定のパーソナリティ構造がみられるとし、これを権威主義的パーソナリティと呼んだ。権威主義的傾向の強い人は社会的地位や成功への関心を強く持ち、順序がはっきりと構造化された社会的関係を好み、理想化された権威に服従的な態度を示すと同時に、自分の信じる因習的な価値に背く個人や集団を非難、排斥し、場合によっては処罰しようとする傾向が強いとされる。こうした態度の背景となる心理機制について、Adornoたちは精神分析理論から考察を行った。すなわち、抑圧された攻撃性が本来の攻撃対象である権威には向けられず、攻撃がなされやすい少数者集団に置き換えられ、さらに自身の持つ

マイナスの特性が少数者集団に投影されることで、攻撃行動が正当化されるとするのである。

『権威主義的パーソナリティ』における Adorno たちの関心は保守的ファシストに向けられていたことから、左翼の権威主義についてはほとんど触れられていない。しかし Rokeach は、権威主義は右翼、左翼に関わりなくみられるとして、政治的イデオロギーとは関連を持たないより一般化された権威主義について、これをドグマティズム (dogmatism) と呼んでその理論的体系化を図っている。要するに、保守的であろうと急進的であろうと、その思考や行動様式には共通するものがあり、権威主義という特性は政治的に両極に位置する集団にも、また熱心な宗教の信者にもみられることがあるとするのである。こうした考えをもとにまとめられたのが『開いた心と閉ざされた心』(The Open and Closed Mind, 1960) である。ここでは情報を取り込み、再構成する過程としての認知の問題に関心が向けられ、早まった結論や物事を具体的な二者択一という形でとらえ易い傾向、思考の硬直性などのドグマティストや権威主義者に特徴的な認知の問題に焦点が当てられた。

一連の研究で見いだされたドグマティストや権威主義者に特徴的な認知様式の問題点は、硬さ (rigidity) と曖昧さに対する耐性の欠如 (intolerance of ambiguity) であった。硬さとは、状況の変化に応じて、効果的に機能するためには思考や行動を変える必要があるときに、以前の思考や行動のパターンに固執してそれを変えようとしないう傾向であり、曖昧さに対する耐性の欠如とは、未分化で構造化されていない曖昧な状況に耐えられず、早急に場を構造化しようとする傾向である。結論を急ぐあまり、不確定な要素があるにもかかわらず物事を黒か白かの極端な範疇で判断しようとする二分法的思考がこの例である。

## 2) ロキーチの信念—非信念システム

知識は宣言的知識と手続き的知識に分けられる。宣言的知識とは、「A は B である」また「A ならば B である」などの宣言的文章や暗示的命題の形で表現される知識であり、手続き的知識とは、課題状況にいかに対応するかについての手続きや技能に関する知識である。Rokeach は宣言的知識に注目し、その構成単位である信念、非信念の内容や構造をもとにドグマティストにみられる認知的特徴について理論化を試みている。Rokeach は、宣言的知識には個人が真実として受容する命題である信念 (belief) と、虚偽として否定する命題である非信念 (disbelief) が在るとする。例えば、「核戦争によって人類は滅亡する」という命題は、それを信じ受け入れる人にとっては信念といえるが、受け入れない人にとっては非信念ということになる。人は知識表現

として無数の信念と非信念を持つが、それらは無関係に在るのではなく、相互に関係を持ちながら独自のシステムを構成しているとされる。また信念、非信念の関連づけの原理は論理的なものではなく、個人の心理的特徴が影響していると考えられている。

信念は同等に重みづけられているわけではなく、その重要度によって中心的なものからそうでないものまで多様である。Rokeach は、重要度をもとに信念を中心的領域、媒介的領域、周辺の領域の3領域にわたる、5つのタイプに分類している。これらの関係を図示したものが Fig.1 [Rokeach (1960), pp. 39-51より筆者が作成] である。中心的領域は原初的信念 (primitive belief) と呼ばれるもので、直接経験をもとに形成されたものである。さらに、それは合意的原初的信念と非合意的原初的信念に分けられる。前者は物理的現実や社会的現実、また自己に関する信念であり、「これは机である」「彼女は私の姉である」「私は何某である」などがこの例である。この信念は疑いようのないもので、誰からも支持される基本的信念と考えられている。後者は当人以外にその真实性を確かめようのないもので、恐怖や妄想、また非合理的な思い込みなど当人の直接経験から導かれた信念がこれに当たる。

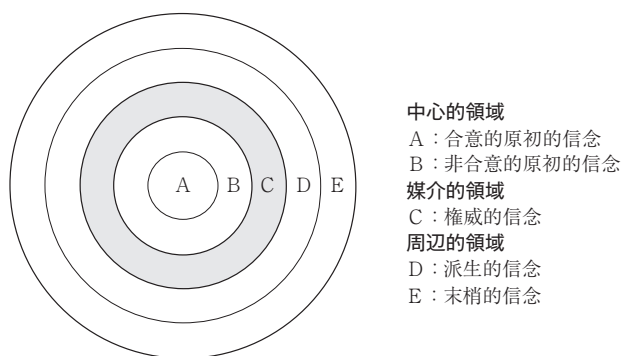


Fig. 1 信念—非信念システムの中心性—周辺性

直接経験の範囲は限られているので、私たちが信じていることの大半は媒体を通じて2次的に獲得されたものである。言い換えるならば、情報を獲得し、それによって今ある知識を点検、再構成することで新しい認知システムを作り上げるには何らかの形で媒体 (権威) に頼ることが必要になる。この際、権威への依存の仕方に個人差がみられ、単一の権威からの情報を簡単に信じこむタイプもあれば、権威からの情報の受容が一時的で、複数の権威からの情報を総合的に判断して信念を作り上げるタイプもある。こうした個人差は権威をどのようにとらえているかによって起こってくる。媒介的領域とは個人が権威について抱く信念で、権威的信念 (authority belief) と呼ばれている。

周辺の領域は、派生的信念 (derived belief) と末梢

的信念 (inconsequential belief) に分類される。派生的信念とは、信頼する権威との間接的な接触をもとに形成された信念である。例えば、信頼する権威に関連した書籍や雑誌などからもたらされた信念がそれである。末梢的信念は個人の好みを反映したもので、他のタイプの信念とはほとんど関連を持たない信念である。認知システムに変化が起こる場合、中心的領域は変化への抵抗が最も大きく、周辺の領域が最も変化しやすいとされる。さらに言うならば、他の領域の変化に比べ、中心的領域の変化は認知システム全体により大きな影響を及ぼすと考えられている。

この5層3領域からなる信念の中で特に注目されるのが、媒介的領域である権威的信念のあり方、すなわち個人が権威をどのようにとらえるかという問題である。情報源としての権威に対して合理的かつ一時的に信頼を寄せる個人もいれば、それが超自然あるいは人間的なものであるにせよ、一つの社会理想という形をとるにせよ、絶対的権威の存在を認め、それに過剰な信頼を寄せる個人もみられる。こうしたケースでは、権威が是認するものはそのまま信念として受容され、それが虚偽として否定するものは非信念として拒絶されるようになる。このようにして、権威によって是認されるものとそれ以外のものといった極端に単純化された二分法がみられるよう

になるとともに、既存の認知システムを脅かすということから、それと矛盾するような情報は回避や無視、場合によっては否認されることにより、既存の認知や行動が頑ななまでに維持されるようになるのである。

Rokeach は、信念の内容、また信念—非信念システムの分化度や隔離といった構造的特徴をもとに、ドグマティズムについて体系化を図っている。ここでの焦点は、個人の認知システムが新しい信念の獲得に対して開かれ、既存の信念システムを必要に応じて変えることができるかどうかであり、個人はその程度に応じて開放から閉鎖に至る連続体上に位置づけられると考えられている。また Rokeach は、この連続体の開放の側を「開いた心」(open mind)、閉鎖の側を「閉ざされた心」(closed mind) として、後者をドグマティズムと同義に用いている。その特徴をまとめたものが Table 1 である。ここで見られるように、「閉ざされた心」では、信念、非信念形成の過程において権威への依存度が高く、信じる権威への過剰な信頼と、それを認めない他者や集団に対する不寛容さが特徴とされている。

Rokeach は、ドグマティズムに関する個人差を測定する目的でドグマティズム尺度 (以下、D 尺度と略す) を開発した。尺度構成の手続きは、既述した信念—非信念システムの開放性—閉鎖性に関する理論をもとに、そ

Table 1 開いた心と閉ざされた心の特徴

開いた心 (open mind)	閉ざされた心 (closed mind)
A. 信念—非信念の連続体に関して、それが以下に示す程度に応じて、	
1. 非信念連続体上のどの点においても、非信念下位システムの拒否度が相対的に低い。	1. 非信念連続体上のどの点においても、非信念下位システムの拒否度が相対的に高い。
2. 信念システム内、及び信念システムと非信念システムの各部分間に相互伝達がみられる。	2. 信念システム内、及び信念システムと非信念システムの各部分間に隔離がみられる。
3. 信念システムと非信念システムの分化度にほとんど差がみられない。	3. 信念システムと非信念システムの分化度に大きな差がみられる。
4. 非信念システムの分化度が相対的に高い。	4. 非信念システムが未分化である。
B. 中心性—周辺性次元に関して、それが以下に示す程度に応じて、	
1. 原初的信念 (中心的領域) の内容が、生活世界、または特定の時間に個人の置かれている状況が親愛に満ちたものであるとする。	1. 原初的信念 (中心的領域) の内容が、生活世界、または特定の時間に個人の置かれている状況が脅威に満ちたものであるとする。
2. 権威や権威システムに固執する人々に関する信念 (媒介的領域) の形式的内容が、権威は絶対的なものではなく、人がかりに評価されるにしても、そうした権威の同意や非同意によって評価されるものではないとする。	2. 権威や権威システムに固執する人々に関する信念 (媒介的領域) の形式的内容が、権威は絶対的なものであって、人はそうした権威の同意や非同意によって受け入れられたり、拒否されたりする。
3. 権威から派生したとされる信念と非信念 (周辺の領域) が、その下位構造において相対的に相互伝達がみられる。	3. 権威から派生したとされる信念と非信念 (周辺の領域) が、その下位構造において相対的に隔離している。
C. 時間的展望に関して、それが以下に示す程度に応じて、	
1. 相対的に広い時間的展望がみられる。	1. 相対的に狭い、未来志向の時間的展望がみられる。

注) Rokeach (1960), pp. 55-56より筆者が作成

ここで定義されたドグマティストにみられる多様な特性が反映されるように質問項目が作成されている。D 尺度に関しては、その妥当性について検討するために、これまでいくつかの因子分析的研究が行われてきた。1000 人を超える比較的大きなサンプルを用いた研究としては、Kerlinger & Rokeach (1966) と Parrott (1971) の因子分析があるが、いずれも D 尺度を単独で扱ったものではなく、ドグマティズムという概念の独立性について検討するために、前者は F 尺度（ファシズム尺度）、後者は R 尺度（硬さ尺度）を一緒にして因子分析を行ったものである。結果では、2つの尺度の項目がそれぞれ別の因子として抽出される傾向がみられたとしているが、なかには両尺度が混ざりあった因子や解釈が困難な因子もみられ、D 尺度の因子構造に関しては不明な点も残る。そこで本研究の目的は、新しく訳出した D 尺度の因子構造と Rokeach の理論化したドグマティズム概念との整合性について検討することにある。

## 2. 方法

### 1) 調査協力者・調査時期・調査手続き

調査協力者は大学生と社会人（保育士、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校に勤務する教育関係者）であった。大学生は全員が教職課程の履修者で、2013～2016年度に開講された教職関連科目の授業の終わりに質問紙を配布し、その場で回収を行った。回答に不備のあったケースを除き、最終的には1357人（男性673名、女性684名）を分析の対象とした。また平均年齢は19.30歳（ $SD=1.25$ ）であった。社会人の場合は、2013～2016年度に実施された研修や講習の機会に質問紙を配布し、その場で回収した。回答に不備のあったケースを除き、最終的には500人（男性182名、女性318名）を分析の対象とした。また平均年齢は41.41歳（ $SD=7.71$ ）であった。なお以下の因子分析では、大学生と社会人を込みにした1857人（男性855名、女性1002名）が分析の対象とされた。また質問紙の配布に際し、本調査への参加は自由意志であり強制的なものではないこと、また回答は無記名であるとともに機械的に統計処理がなされるので、個人に影響が及ぶことはない旨を伝えた。

### 2) 質問紙

認知システムの開放性—閉鎖性に関する個人差を測定する目的で Rokeach が開発した、D 尺度を使用した。この尺度は、最初に作成された89項目からなる A 型（Form A）から最終的な40項目で構成された E 型（Form E）に至るまで計4回の改訂が行われている。尺度の構成手続きは、既述の認知システムの開放性—閉鎖

性に関する Rokeach の理論をもとに、そこで定義されたドグマティストにみられる多様な特性が反映されるように項目構成がなされている。また具体的な質問項目の作成に当たっては、特定のイデオロギーの立場に偏ることがないように配慮がなされたとされている（Rokeach, 1960）。尺度は大きく分けると、①認知システム（信念—非信念システム）の構造、②中心性—周辺性次元の構造およびその内容、③時間的展望の3領域で構成されており、Table 1 で示したように、3領域のそれぞれにおいて認知システムの開放性（開いた心）—閉鎖性（閉ざされた心）の特徴が提示され、それらに沿って質問項目が作成されている。

本研究で使用された E 型は40項目で構成され、「全くそう思わない～非常にそう思う」の6段階で回答を求めらるもので、「どちらともいえない」等の中間項目は設定されていない。Rokeach のスコアリングでは、「全くそう思わない」を1点、「かなりそう思わない」を2点、「ややそう思わない」を3点、未回答を4点、「ややそう思う」を5点、「かなりそう思う」を6点、「非常にそう思う」を7点として得点化がなされているが、本研究もこれに準拠して得点化を行った。また邦訳に際しては、文化差や時代差など配慮すべき点も多いことから、Rokeach の尺度構成の真意を変えない範囲で意識を行った。

## 3. 結果と考察

### 1) D 尺度の因子分析と信頼性分析の結果

40項目からなる D 尺度について重み付けのない最小2乗法（Promax 回転）による因子分析を行った。スクリー・プロットを検討した結果、因子数は5因子解が最適と考えられた。そこで因子数を5に指定して因子分析を行ったが、結果的に因子解釈が困難であったため、共通性の低かった「3. 理解されているかどうかを確かめるために、議論では同じことを何度かくり返して言うことが大切だ」「8. この世に存在するものの見方や考え方の中で、おそらく正しいものはたった一つであろう」「12. やらなければならない事がたくさんあるのに、それをする時間がない」「22. 機会があれば、世の中のために何らかの貢献がしたい」「36. 長い目で見ると、最良の生き方とは、同じ趣味や信念を持つ仲間をみつけ、一緒にやっていくことである」（数字は D 尺度の項目配列番号）を分析対象から除外し、35項目で再度因子分析を行った。その結果と因子間相関が Table 2 である。

第1因子に因子負荷量の高い項目は、「もともと、私たちの生きている世界は心さびしいところである」「もともと、人間は無力で哀れな存在である」など厭世観や無力感を表す内容で構成されていた。さらに残りの項目

Table 2 ドグマティズム尺度の因子分析結果

	F1	F2	F3	F4	F5
33. もともと、私たちの生きている世界は心ざしいところである	.71	.03	-.05	-.08	.07
27. もともと、人間は無力で哀れな存在である	.60	.01	-.06	-.05	.01
32. 不幸なことに、社会的、道徳的な問題についてこれまでに話し合ってきた多くの人たちは、何が起きているのか本当は理解していない	.55	.11	-.05	.07	-.07
4. 自分にとって本当に大切なものは何か、たいていの人は分かっていない	.51	-.04	-.02	.18	-.17
38. これから先、なにか大変なことが起こりそうで怖い	.48	-.19	.13	-.01	.07
19. たいていの人間は、他人のことなどどうでもよいと思っている	.46	.15	.08	-.11	-.02
31. 現在は余りにも不幸に満ちている。大切なのは、まさにこれからである	.40	.05	-.04	.05	.18
23. 今の時代には、考えや意見が対立する人間よりも、味方や仲間の裏切りに警戒することの方が必要である	.36	.10	.08	-.01	.08
29. 人類の歴史の中で、真に偉大な思想家と呼べる人物はごく少数に限られる	.22	.18	-.03	.14	-.01
15. 自分とは相いれない考えや意見については、あまり知ろうとは思わない	-.11	.56	.17	-.11	.05
14. 異なる考えや意見を持つものを許しているような集団は長続きしない	-.04	.50	-.01	.06	.05
37. 今広まっている考えや意見の多くには、ほとんど価値がない	.33	.42	-.02	-.07	-.07
28. 考えや信じるものが違えば、決して本心から分かり合うことはできない	.10	.41	.10	-.13	.08
21. 利害や意見が対立している人間との妥協は、味方や仲間の信頼を失うことにもつながりかねないので危険である	.05	.40	.03	.13	.03
20. いろいろな主義や主張に熱狂的になる人は、中身のない人間であることが多い	.23	.36	-.03	-.02	-.09
40. 人生の目的や生き方について考えや意見がくい違ふとき、そうした人間と安易に妥協すべきではない	.01	.32	.19	.18	-.03
30. どのような集団や組織においても個人の考えや意見が生かされることは大切であるが、最終的決断は優れたリーダーに任せればよい	.06	.20	-.00	-.09	.20
25. 一度激しい議論で興奮すると、途中でやめられなくなる	-.05	.04	.76	.05	-.04
24. 激しい議論では、自分の言うことに夢中になってしまい、相手の言うことに耳を貸さないことがよくある	-.03	.05	.70	-.04	-.01
39. 相手がまちがいを頑固に認めないとき、私はいつもかっとなってしまふ	.02	.11	.58	.05	.00
11. めざすものや考え方の違いがもつて、嫌いになった人間が大勢いる	.13	.19	.31	-.01	-.03
9. 理想に向かって懸命に努力をするとき、はじめて人生は意義あるものになる	-.05	.06	-.08	.50	.17
13. おくびょう者として生きるよりも、勇敢に戦って死ぬほうがまだ	-.09	.09	.03	.48	-.07
18. 人生において自分に与えられた使命を果たそうと思うなら、時には「一か八か」の賭けにでることも必要である	.16	-.25	.09	.45	-.08
6. 何か大きな理想を信じていない人は、これまで本当の意味で生きてきたとはいえない	-.11	.35	-.01	.43	.04
16. 自分が憧れる偉大な人物のようになりたいと、ひそかに思うことがある	.02	-.25	.15	.39	.13
2. 人生で大切なのは、人から認められるような何か大きなことを成し遂げようという気概を持つことだ	.02	.03	-.00	.33	.22
5. このような時代に、自分の喜びや幸せを第一に考えるとしたら、利己的な人間と呼ばれてもしかたがない	.15	.18	-.09	.30	-.08
1. 自分の利益や幸福ばかり考えるような人は価値のない人間である	-.07	.24	-.10	.27	-.05
17. 何でも自由に言い合えることは大切なことではあるが、それをほき違えている人間には制限も必要である	.19	-.10	.03	.23	-.08
10. この複雑な世の中で、何が起きているのかを知りうる一番の方法は、信頼できる指導者や専門家に頼ることである	-.08	.03	-.05	-.02	.63
34. 尊敬する人の意見を聞くまでは、何が起きているかについての判断は差し控えた方がよい	.07	.24	-.04	-.07	.44
7. 個人的な問題について、どうしたらいいのか教えてくれるような人がいたら、どんなにか助かるのと思うことがある	.15	-.17	.10	.09	.31
26. この世には二種類の人間がいる。それは真理を信じる人間と、それに反対する人間である	.11	.12	-.02	.14	.27
35. やってはならない最悪の罪は、同じ考えや意見を持つ仲間の人前で恥をかかすことである	-.07	.17	-.03	.13	.26
	因子間相関	F1	F2	F3	F4
	F2	.46			
	F3	.36	.20		
	F4	.33	.21	.21	
	F5	.38	.45	.20	.40

※文頭の数字はロキーチの原版の項目配列番号を示す。

も、「不幸なことに、社会的、道徳的な問題についてこれまでに話し合ってきた多くの人たちは、何が起きているのか本当は理解していない」「自分にとって本当に大切なものは何か、たいていの人は分かっていない」などの一般化された他者への不信感や、「現在はあまりにも不幸に満ちている。大切なのは、まさにこれからである」といった現在への否定的認識を示す内容が中心であった。こうしたことから、これはドグマティストや権威主義者に特徴的な原初的で根本的な世界観や人間観を反映した因子と考えられ、孤独や孤立、人間や人間性に対する不信、不安や無力感を示すものと解釈される。なお第1因子に含まれる項目の多くが Kerlinger &

Rokeach (1966) や Parrott (1971) の研究で見いだされた関連因子の内容と重なっていたため、先行研究に準じて、第1因子を「孤立—疎外感」と命名した。

第2因子に負荷量の高かった項目は、「自分とは相いれない考えや意見については、あまり知ろうとは思わない」「異なる考えや意見を持つものを許しているような集団は長続きしない」「今広まっている考えや意見の多くには、ほとんど価値がない」「考えや信じるものが違えば、決して本心から分かり合うことはできない」「利害や意見が対立している人間との妥協は、味方や仲間の信頼を失うことにもつながりかねないので危険である」など自分が信じる考えや意見の絶対視とそれらが異なる

他者や集団に対する敵対視や排斥、すなわち信念の異なる他者や集団に対する不寛容さを示す内容で構成されていた。この背景には、世界を自分の信じるものの方や考え方を受け入れる人や集団とそれを斥ける人や集団に二分し、その差を強調することで、自分とは相いれない他者や集団に敵意を向け、場合によっては排斥するといった内集団—外集団的意識や態度が存在すると考えられるが、ここでは内集団的意識や態度に関連した項目がみられなかったことから、第2因子を「信念の異なる他者や集団に対する不寛容さ」と命名することにした。

第3因子は、高い負荷量を示す項目数が5因子の中で最も少なかった。負荷量の高い「一度激しい論議で興奮すると、途中でやめられなくなる」「激しい議論では、自分の言うことに夢中になってしまい、相手の言うことに耳を貸さないことがよくある」は Rokeach の尺度構成の「考えや主張の強迫的反復」に含まれる項目であったが、「相手がまちがいを頑固に認めないとき、私はいつもかっとなってしまふ」「めざすものや考え方の違いがもつて、嫌になった人間が大勢いる」の2項目はこれには対応していなかった。この2項目はいずれも自己の正当性に関連しており、前の2項目も自己の正当性の確認やその侵害に対する防御反応としての強迫的反復と解釈されることから、第3因子を「自己の正当性への拘り」と命名した。

第4因子に負荷量の高い「理想に向かって懸命に努力をするとき、はじめて人生は意義あるものになる」「何か大きな理想を信じていない人は、これまで本当の意味で生きてきたとはいえない」の項目は、生きる上での理想や使命の重要性を表している。また「おくびょう者として生きるよりも、勇敢に戦って死ぬほうがましだ」「人生において自分に与えられた使命を果たそうと思うなら、時には「一か八か」の賭けにでることも必要である」は理想や使命を果たす手段や殉難への覚悟に関連したものである。またその他の項目の中には、「自分が憧れる偉大な人物のようになりたいと、ひそかに思うことがある」「人生で大切なのは、人から認められるような何か大きなことを成し遂げようという気概を持つことだ」という、Rokeach の尺度構成では「権力や社会的地位への関心」とされる項目や、「このような時代に、自分の喜びや幸せを第一に考えるとしたら、利己的な人間と呼ばれてもしかたない」「自分の利益や幸福ばかり考えるような人間は価値のない人間である」といった公利を優先し私利私欲を否定する内容もみられる。こうした内容に共通するものは、人生における社会的目的や使命の重要性であり、そのためには私的な幸福を犠牲にすることも厭わないとする信念と解釈されることから、第4因子を「社会的理想や使命への信念」と命名することにした。

第5因子に因子負荷量の高い「この複雑な世の中で、

何が起きているかを知りうる一番の方法は、信頼できる指導者や専門家に頼ることである」「尊敬する人の意見を聞くまでは、何が起きているかについての判断は差し控えた方がよい」「個人的な問題について、どうしたらいいのか教えてくれるような人がいたら、どんなにか助かるのにとと思うことがある」は、いずれも権威への依存や服従を示す内容で構成されていた。また他の項目も内集団的権威に関する内容が中心であったことから、第5因子を「内集団的権威への服従」と命名した。

以上、ドグマティズムは「孤立—疎外感」、「信念の異なる他者や集団に対する不寛容さ」、「自己の正当性への拘り」、「社会的理想や使命への信念」、「内集団的権威への服従」という5つの因子で構成されていた。これを先行研究の因子分析結果と比較してみると、既述のように第1因子「孤立—疎外感」は Kerlinger & Rokeach (1966) と Parrott (1971) の研究で見いだされた同名の因子と多くの項目が重なっていた。また第2因子「信念の異なる他者や集団に対する不寛容さ」は Parrott の「外集団の抑圧」因子と、第3因子「自己の正当性への拘り」は2つの先行研究の「強迫的な自己確認」因子と含まれる項目が重なっていた。さらに第4因子「社会的理想や使命への信念」、第5因子「内集団的権威への服従」も両研究の同名の因子に多くの重なりがみられた。

ここで因子間相関の結果をみると、第1因子「孤立—疎外感」は他のすべての因子と中～弱程度の正の相関がみられ、第2因子「信念の異なる他者や集団に対する不寛容さ」と第5因子「内集団的権威への服従」、また第4因子「社会的理想や使命への信念」と第5因子「内集団的権威への服従」にも中程度の正の相関がみられた。第1因子は信念—非信念システムにおいて最も重要度の高い中心的領域（原初的信念）の内容を示したもので、権威主義者やドグマティストに特徴的な考えや態度の前提となる中核的な信念であることから、他のすべての因子と相関がみられたものと考えられる。また第2因子と第5因子との相関は、権威主義者やドグマティストにみられる強者（権威）への服従と弱者への攻撃や支配という両面的態度や行動を、また第4因子と第5因子との相関は権威への同一視とその結果としての権威への服従という関係を示すものと考えられる。

また Table 1 で示したように、Rokeach は時間的展望に関する信念を認知システムの開放性と閉鎖性を峻別する重要な要因と考えていたようであるが、因子分析結果では時間的展望に関する信念は単一の因子としては抽出されなかった。今回使用した D 尺度には、時間的展望に関する項目が4項目設定されており、そのうち3項目（項目番号4、31、32）は第1因子に、残り1項目（項目番号18）は第4因子に属していた。Ehrlich (1978) は、時間的展望に関する信念について、これは権威主義者や

ドグマティストに特徴的な世界観や人間観を反映した原初的信念の一形態としてとらえるほうが適切ではないかとしているが、本研究結果はこうした見解を支持するものと考えられる。

なおD尺度の信頼性分析の結果に関しては、因子分析での除外項目を除いた35項目の場合、Cronbachの $\alpha$ 係数は $\alpha = .84$ という高い信頼性を示した。

## 2) D尺度の所属集団別、性別の平均値(標準偏差)と分散分析結果

ドグマティズム傾向の強さの、属性(学生・社会人)や性別による違いについて検討した。ドグマティズムについては、因子分析で用いた35項目の得点を単純加算してドグマティズム得点とした。得点の範囲は35~245点であり、得点が高いほどドグマティズム傾向が強いことになる。なお属性別、性別の平均値(標準偏差)と分散分析の結果をTable 3に示す。

ドグマティズム傾向の強さと属性、性別との関係を見るために、ドグマティズム得点を従属変数として、属性(学生・社会人)×性別(男性・女性)の2要因の分散分析を行った。その結果、属性と性別に主効果がみられたが、交互作用は認められなかった(属性; $F(1,1853) = 245.36, p < .001$ 、性別; $F(1,1853) = 17.48, p < .001$ 、交互作用; $F(1,1853) = 2.09, n.s.$ )。属性では社会人に比べ学生のほうがドグマティズム得点は高く、性別では女性に比べ男性のほうが得点は高かった。属性に関しては、この結果が社会的立場の違いからか、社会人のすべてが教育関係者であったことによる職業集団固有の問題であるのか、また発達や年齢の違いによるものかについては明らかではないが、学生が将来教職を希望する教職課程履修者であったことからすると、教職経験の有無といった要因の影響も考えられよう。

性差に関して、Alter & White (1966)は女性に比べ男性の得点のほうが高いことを報告しているが、Anderson (1962)の研究ではドグマティズム得点に性差はみられなかった。今回の結果の説明には文化差や時代差など考慮すべき問題も多いが、性差がみられたとする先行研究では、その理由の一つに両性に対する文化的な役割期待の違いが指摘されている。時代や文化が違う

とはいえ、今回みられた結果にもこうした問題が影響しているとも考えられよう。

## 4. 総合的考察

本研究はD尺度の因子分析によって得られた因子と、Rokeachの理論化したドグマティズム概念との関係について検討することを主たる目的とした。因子分析では5つの因子が抽出され、先行研究の結果を参考に、第1因子「孤立—疎外感」、第2因子「信念の異なる他者や集団に対する不寛容さ」、第3因子「自己の正当性への拘り」、第4因子「社会的理想や使命への信念」、第5因子「内集団的権威への服従」と命名を行った。

ここで、これらの因子とドグマティズム概念との関連についてみていくと、自己や権威についての信念に関してRokeach (1960)は、ドグマティストには「われわれは寄る辺のない世界で孤立していて無力である。また世界は不確実で、これから先どうなるか分からない。自分は基本的に価値のない人間であって、この寄る辺のない世界に一人で立ち向かうには不適切な人間である。こうした感情に打ち勝つ方法は、自己の誇大化や正当化が可能であるような主義主張に同一化して権力や地位を得ることであり、さらにそうした主義主張の正当性について繰り返し確認していくことである」といった特徴がみられるとしている。

ここで述べられているように、ドグマティストや権威主義者には自己価値についての不信が根本にあり、そうした不適合感や無力感の補償や反動形成として、自己の誇大化や正当化が可能となる権威への同一化が図られるようになるとされている。本研究で見いだされた因子との関連で言えば、孤立感や無力感などの自己価値についての不信は「孤立—疎外感」因子において、権威への同一化は「社会的理想や使命への信念」因子においてみられる。また権威への同一化の結果として権威への依存や服従(「内集団的権威への服従」因子)が生じるものと考えられる。さらに、主義主張の正当性についての強迫的確認は「自己の正当性への拘り」因子にみられるとともに、自己の存立の基盤である主義主張の正当性を脅かすような他者や集団に対して敵意や排斥といった不寛容

Table 3 D尺度の属性別(学生・社会人)、性別の平均値(標準偏差)及び分散分析結果

	学生(N=1357)	社会人(N=500)	全体(N=1857)	F値		
	平均値(SD)	平均値(SD)	平均値(SD)	属性	性別	交互作用
男性(N=855)	136.14(20.80)	117.03(24.82)	132.08(23.07)			
女性(N=1002)	129.86(19.17)	113.97(21.42)	124.82(21.23)	245.36	17.48	n.s.
全体(N=1857)	132.98(20.23)	115.08(22.74)	128.16(22.38)	社会人<学生	女性<男性	

な態度や行動（「信念の異なる他者や集団に対する不寛容さ」因子）がみられるようになると考えられる。

以上、本研究の因子分析結果では、概ね Rokeach のドグマティズム概念に沿った因子が抽出されたが、因子間の関係については推測の面も多く、曖昧さも残る。今後は、確認的因子分析モデル等によって因子間の関係についてより明確にしていくことが必要であろう。

## 引用文献

- Adorno, T. W., Frenkel-Brunswick, E., Levinson, D. J., & Sanford, R. N. 1950 *The authoritarian personality*. New York : Harper & Brothers. (田中義久・矢沢修次郎・小林修一訳 1980 権威主義的パーソナリティ 青木書店)
- Alter, R. D., & White, B. J. 1966 Some norms for the Dogmatism Scale. *Psychological Reports*, **19**, 967-969.
- Anderson, C. C. 1962 A developmental study of dogmatism during adolescence with reference to sex differences. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **65**, 132-135.
- Ehrlich, H. J. 1978 Dogmatism. In H. London, & J. E. Exner, Jr. (Ed.), *Dimensions of personality*. New York : John Wiley & Sons. Pp.129-164.
- Ehrlich, H. J., & Lee, D. 1969 Dogmatism, learning, and resistance to change : A review and a new paradigm. *Psychological Bulletin*, **71**, 249-260.
- Fromm, E. 1941 *Escape from freedom*. New York : Farrar & Rinehart. (日高六郎訳 1951 自由からの逃走 東京創元社)
- Goldstein, K. M., & Blackman, S. 1978 *Cognitive style: Five approaches and relevant research*. New York : John Wiley & Sons. (島津一夫・水口禮治訳 1982 認知スタイル 誠信書房)
- Kerlinger, F., & Rokeach, M. 1966 The factorial nature of the F and D scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, **4**, 391-399.
- Parrott, G. 1971 Dogmatism and rigidity : A factor analysis. *Psychological Reports*, **29**, 135-140.
- Rokeach, M. 1954 The nature and meaning of dogmatism. *Psychological Review*, **61**, 194-204.
- Rokeach, M. 1960 *The open and closed mind*. New York : Basic Books.
- 善明宣夫 1992 開いた心と閉ざされた心—ロキーチの理論を中心に— 大阪商業大学論集, **94**, 91-106.
- 善明宣夫 1998 認知とパーソナリティ 乾原 正他 パーソナリティ・プロファイル 八千代出版 Pp.87-102.
- 善明宣夫 2001 硬さとドグマティズム—その概念的相違について— 教職教育研究 (関西学院大学教職教育研究センター紀要), **6**, 29-39.

(ぜんみょう のおお・関西学院大学教授)